

# 4年生主催の内定者報告会を終えて

佐藤有耕

人間総合科学研究科助教授

## 1. 就職委員会の終結と純増

人間学類就職委員会は、3年後にその活動を終える。というのも、人間学類そのものが無くなるからである。政治の世界では、防衛庁が防衛省に格上げされたとのことであるが、人間学類もいずれ人間学群に名称が変わる。各学問領域を大同団結させた人間総合科学研究科とは対照的に、小さな3学類に分割したプチ学群としてリニューアルする。学生定員も教員数も建物も、大きく変更する予定はなかろうが、就職委員会は3倍に純増される計算になる。これまで以上に就職に力を入れるということである。

## 2. キャリアデザイン入門の立ち上げ

これまで、人間学類では、年1回進路説明会を行ってきた。すでに3回実施され、参加学生は毎回100名近い。しかし、これも毎回のことなのだが、必ず時間が足りなくなる。ひとりの学生の人生をかけた進路決定は、

15分やそこの短い時間で語れるものではない。また、何年か社会人として働いている人が、自分の誇りでもある職業について語るのは、1時間あっても語りきれそうになかった。

そこで今年度から新たに始めるのが、進路説明会を授業に取り込むことである。2年生以上を対象とした「キャリアデザイン自由研究」、1年生を対象とした「キャリアデザイン入門」という2つの授業が、就職委員会を世話役として立ち上げられた。「キャリアデザイン入門」が、進路説明会を複数組み入れたようなカリキュラムになっている。キャリアデザインのためのガイダンスとグループワーク、現役学生・院生によるパネルディスカッション、キャリアデザインに関する専門家からの講演会、学類卒業生社会人による講演会、学類教員による大学院進学の説明会を予定している。授業化することで、複数の日程での実施がしやす

くなった。

1年生対象の授業であるため、あえて科目を新設しなくても、フレッシュマンセミナーを使えばよいという意見もあるかもしれない。しかし、新入生の1学期という大事な時期の10コマは貴重である。まず、担任と学生がお互いを知り合う時間にする必要がある。それだけではない。カルトの恐怖、筑波大学の学生組織、学生相談室の案内、飲酒と喫煙の問題、就職課の活用方法、大学生向けの性教育、話しておきたいことは山ほどある。フレッシュマンセミナーをキャリア教育に活用するという発想は、学生指導に余裕のある学類でなければ難しいように思われる。

### 3. 学生による内定者報告会の開催

学類が、新たな授業科目を設定して学生のキャリア教育を推進しようとするのは時代の自然な流れである。今回報告したいのは、教員の企画とは別に学生が行った内定者報告会のことである。

人間学類の学生は、学年を越えたクラス縦のつながりが強く、上級生と下級生の距離が近い。先輩学生の、後輩に対して何かしてあげたいという思いは、相当に深いものがある。人間学類の教員は、彼らの後輩思いの伝統に助けられてきた。彼らのその思いがあればこそ、春の新歓オリエン

テーションや夏の大学説明会での手厚い対応が可能となっていたのである。学生が人間学類の伝統を築き、人間学類特有の学生文化を創ってきた。

その学生たちは、これまで毎年2月に行われてきた進路説明会にも協力してくれてきた。その彼らが、今年度は、独自に内定者報告会を実現したのである。

その理由として、2月では遅すぎるものがあげられていた。教員主導の進路説明会は、4年生の卒論発表会が終わった後がよいと考えて2月に設定していた。しかし、年末から企業へのアプローチを開始する今どきの3年生には間に合わない。もっと早く、3年生にも間に合ううちに就職内定者の報告会を提供したいというのが4年生の希望であった。

10月に企画が立ち上がり、報告会が行われたのは11月8日のことであった。この迅速さは、学生ならではのと言える。第1部では、6名の内定者が自分の就職内定と教員採用試験合格について語ってくれた。フロアの下級生たちからはいくつも質問の手が上がり、教員主催の進路説明会よりも、壇上とフロアとの距離が近いように見えた。会場には全部で60名ほどの学生が集まっていた。第2部はさらに5名の4年生が加わり、フロアの下級生たちと自由に懇談できる時間を取ったとのことであった。

#### 4. 教員主催と学生主催との違い

彼らが手作りで用意したパンフレットには、「はじめの一步、踏み出そう」と書かれており、すべての話題提供者が自分の体験記を綴っていた。その中には、彼らの等身大の就職体験が描かれているように見えた。身近な先輩が自分の字で書いたメッセージは、就職から遠く離れた日々を過ごしている教員のアドバイスよりも、説得力があるかもしれない。

近年、思春期学会の中では、ピア・エデュケーションによる性教育の成功例がいくつも報告されている。体系的な知識を大人の専門家が整然と講義するよりも、医学生や看護学生たちの話を聞き、語り合う方が若者の心にしみ入るようなのである。今回、4年生が企画運営し、下級生が熱心に質問するこの報告会を見ていて、会場の雰囲気なのがやかさが印象に残った。上級生と下級生の間には、教員が入り込まないことによって、(良い意味での) 子どもの世界のような気の置けない雰囲気が生まれるように見受けられた。

#### 5. 人間学類の後輩たちへのエール

企画した学生によれば、今回の内定者報告会で伝えたかったことは、「たとえ大学での学問が職業に直結しないものでも、大学の学びに意義はあるし、学びを仕事に活

かす機会はいくらでもある」ということであつた。

人間学類が標榜しているのは、独立した学問としてあるかないかは怪しげであるが「人間学」である。教員は「人間学」の怪しさを恐れてか、少しずつ「人間学」の看板を隠してきた。すでに「人間学」を冠した科目名は存在していないはずだ。

しかし、学生には自分たちが「人間学」のもとに集い、それを学んできたという誇りがあるようだ。“人間に関わる仕事をしたいと考えてその業界の中で就活していたが、途中で人間に関わらない仕事なんて無いことに気づいて、業界の幅を広げた。そのおかげで内定先の会社と出会えた”。ある4年生が書いていた文面である。

その通り、人間に関わらない仕事は無いであろうし、人間学類生の専門は、これまた看板通り「人間学」という幅広いものであつたのだ。狭い学問領域に自分を押し込めるのは不自由だ。既存の学問の専門職にとられる必要もない。あらゆる仕事が、人間学類生の専門職と見なせる。だから自信を持って学び、刮目してあらゆる業界に飛び込んでみよ。これが消えゆく運命の中で進級していく下級生へ残した、先輩からのメッセージだと思われた。

(さとう ゆうこう／青年心理学)